

算博士小槻今雄について

近畿数学史学会 田中 延佳・田村 三郎・吉田 柳二

HMS of Kinki N. Tanaka, S. Tamura, R. Yoshida

(1) 阿保氏・小槻氏

「古事記」の「垂仁天皇」の項を見ると、垂仁天皇には七人の妃がいたが、4番目の妃阿耶美能伊理毘売命との間に二子があり、その一人が伊許婆夜和気命である。この命は沙保(奈良県佐保町)の穴太部之別の祖であるという註がある。また6番目の妃菟羽田刀弁との間に三子があり、その一人が落別王である。この王は小月之山君・三川之衣君の祖先であるとの註がある。

「日本書紀」の「垂仁天皇」の項を見ると、垂仁天皇には七人の妃がいたが、4番目の妃薊瓊入媛との間に二子があり、その一人が池速別命である。また6番目の妃菟幡戸辺との間に三子があり、その一人が祖別命である。

「新撰姓氏録」(815)によると、「阿保朝臣。垂仁天皇の皇子、息速別命の後なり。息速別命、幼弱し時、天皇、皇子の為に、宮室を伊賀国阿保村(三重県青山町阿保)に築りたまひ、以て封邑と為せり。子孫因りて家りき。允恭天皇の御代、居地の名を以て、阿保君の姓を賜う。廢帝の天平宝字八年、公を改め朝臣の姓を賜ふ。」とある。

以上のことから、小槻氏は落別命(祖別命・於知別命)の後裔で、池速別命(息速別命)の後裔である阿保氏とは出自を異にしている。

(2) 小槻大社・小槻神社

於知別命の後裔である小月山君、小槻山君、小槻山公、小槻臣、小槻連の一族は近江国栗太郡に住していた。「続日本紀」天平9年(739)2月14日に小槻山君広虫の名が見えるし、「日本後紀」の延暦24年(805)8月7日には小槻連浜名と見える。さらに、「続日本後紀」の嘉祥2年(849)7月27日には近江国栗太郡の人小槻山公家嶋が本拠を改め、左京五条三坊に貫附したと出ているし、また貞観5年(863)正月に小槻山公広宅の名も見えている。栗東町下戸山に小槻大社があるし、草津市青池町には小槻神社がある。両神社はともに延喜式に記載された古社であって、距離的にみても1.5キロメートルしか離れていないので、上記小槻氏一族の本貫地を両神社のあるあたりと考えて差し支えなからう。

小槻大社の祭神は於知別命と大己貴命(大国主命)であるが、ある資料には小槻氏の祖神息速別命を祭るとしてあるものもあるが、上の(1)でみたように誤りと思われる。当然のことながら、当社に掲げられた「小槻大社由緒」や「小槻大社社歴」にはこの誤りは見られない。神名帳には大社とは記されていないが、草津市の小槻神社と区別するがために、小槻大社と称したのであろうという。また、この小槻大社は小杖大明神とも言い、通称小杖社と言われている。

小槻神社の祭神は於知別命と天兒屋根命である。天兒屋根命は「古事記」や「日本書紀」

に出ているように、天照大神が天の石屋戸にこもられた時、祝詞を唱え、最後に八咫の鏡を差し出した神である。拝殿に学問の神様 天兒屋根命（文系）、於知別命（理系）と書かれているのは面白い。

いずれも於知別命を祭神としており、小槻一族が自らの始祖於知別命を神として祭ったことがわかる。小槻大社境内に古墳時代後期（六世紀後半頃）と見られる古墳があり、被葬者は不明であるが、小槻山君一族のものであろうと考えられている。

（3） 小槻今雄

「日本三代実録」の貞観 15 年(873)12 月 2 日「近江国栗太郡人正六位上行左少史兼算博士小槻山公今雄、主計算師大初位下小槻山公有緒等、改本居貫左京四条三坊」と見える。これで見ると、栗太郡から京都に移住した貞観 15 年にはすでに算博士で左少史であったことがわかる。貞観 17 年 12 月 27 日の条に「左京人右大史正六位上兼行算博士小槻山公今雄、主計算師大初位下小槻山公有緒、近江国栗太郡人前伊豆権目正六位上小槻山公良真等。並阿保朝臣、息速別命之後也」とある。これは問題の記事であって、(1)でも指摘したように小槻山公は於知別命の後であって、息速別命の後ではない。栗田寛氏は「古事記を考ふるに、小槻山公は落別王より出たるを、此に息速別命の後とみつるは疑はし、御兄弟の由縁によりて誤れるか、三代実録の古写本に、息速二字を意の一字に作り、意の下に知字脱たるにはあらざるか、しかるを阿保朝臣とあるより後人さかしらに、息速と改めしにもやあらむ、されど落別王の跡に、阿保姓を賜へるもまたあやまれり」と述べておられる。子の阿保朝臣^{マサヒラ}当平は旧姓の小槻宿禰に復しているし、以降小槻家は宿禰の姓を唱え、阿保朝臣を名乗ることがなかった。親が朝臣姓であるのに、子が降格して宿禰姓を名乗る例はないことから、不正への反省もしくは指摘があったのかも知れない。この日（貞観 17 年 12 月 27 日）、「外従五位下行算博士兼但馬介阿保朝臣今雄」とあるので、外従五位下に進み但馬介を兼ねていたことがわかる。さらに、元慶 1 年(877)4 月 26 日には「外従五位下行算博士兼但馬介阿保朝臣今雄、並六位四人行主基事」とある。これは五位の今雄と六位の者四人に大嘗会^{ダイジョウエ}の檢校^{ケンギョウ}および悠紀主基^{ユキヌスキ}の行事を行わせたことを述べている。元慶 3 年 11 月 25 日には「外従五位下勘解由次官兼算博士但馬介従五位下」とあるので、勘解由次官^{カンゲユジ}も兼ねていて従五位下に進んでいる。以降の記録は六国史の中には発見できない。

（4） 法光寺・那波加神社・雄琴神社

栗太郡と琵琶湖の対岸の苗鹿^{イフカ}・雄琴^{オトコ}地区に小槻家の所領があった。そこに小槻家の氏寺である法光寺と、小槻家の氏神と思われる那波加神社および雄琴神社がある。それぞれの寺社の由緒書や、「新修大津市史」、「わが郷土雄琴の歴史を探る」などをもとに、これら寺や神社に言い伝えられてきていること、特に今雄にまつわることを中心に書いてみよう。

法光寺は大津市苗鹿町にあり、天台宗延暦寺の末寺である。この寺は清和天皇貞観 5 年(863)小槻宿禰今雄の創建されたもので、本尊は薬師如来の立像である。本堂の前には今雄の供養塔という鎌倉時代の石造宝塔がある。この宝塔はかつて法光寺の裏山にある寺山古墳（三つの円墳からなるらしく、中央の主墳は今雄の墓だといわれている）の墳丘上に

建っていたものを移転したのだという。今雄は元慶8年(884)7月7日に没した。今でも毎年7月7日を今雄忌として、雄琴自治会長および雄琴神社氏子代表を招じて、今雄墓前で供養を行っているそうである。

那波加神社も大津市苗鹿町にあり、那波加神社(下の宮)と那波加荒魂神社(上の宮)とからなっている。祭神は天太玉命アマノフツグノミコトと於知別命である。天太玉命は布刀玉命とも書かれ、「古事記」や「日本書紀」にも出て来る神である。小槻神社の祭神であった天兒屋根命と同じく、天照大神が天の石屋戸にこもられた時、幣をかかげ持ち、最後に八咫鏡を差し出した。迹迹芸命ニギハヤヒノミコトに同行して天降りした五神のなかに太玉命がいる。社伝によると、天太玉命はこの地に降臨された。老翁となられた天太玉命の農事を助けるため鹿が現れ、稲(苗)を背に負って運んだと言われている。(地名苗鹿の由来) 那波加神社の創建は、天智天皇7年(668)とも、大同2年(807)とも言われ、仁寿1年(851)、勲功により小槻宿禰今雄が雄琴荘を賜って以降、法光寺を氏寺に、那波加神社および雄琴神社を氏神として祭ってきたといわれている。延長5年(927)、那波加神社は「延喜式」の式内社に選ばれている。那波加荒魂神社(上の宮)には主神天太玉命のほか、長谷今雄オホノを祭る大炊神社がある。長谷今雄と小槻今雄の関連については後述する。

雄琴神社は雄琴町守山にあり、主神は大炊神長谷今雄宿禰サツラで、早良親王スダラ(宗道天皇)、大国主命(大己貴命)らを合祀している。(早良親王は光仁天皇の皇子で、桓武天皇の異母兄弟である。桓武天皇の即位に伴い、皇太子となったが、藤原種継の殺害に関与したとして、皇太子を廃され、淡路に向かう途上で憤死した。後、早良親王の怨霊に悩まされ、宗道天皇の尊号を贈ると同時に社寺に御霊を祭った。) 大同3年(808)3年の創建と伝えられるが、勘解由次官長谷今雄宿禰の没後、その子の小槻当平あるいは当平の孫の忠臣の時代に、今雄宿禰の神霊をこの雄琴神社に祀り、雄琴大炊神と称し、禰家ミケ(小槻宿禰家)の氏神として祭った。これで見ると、祭神長谷今雄と小槻今雄は同一人物のように思われる。

「わが郷土雄琴の歴史を探る」の中に「栃木県宇都宮市に近い壬生町に、祭神も社号も同じ神社がある。今雄宿禰より二十七世の孫晴富(1413—1505)の弟、壬生彦五郎胤業(1430—1504)という人が、寛正3年(1462)下野国壬生の領主として赴任した。彼は着任後それまでにそこにあつた藤森神社に、江州雄琴村に鎮座する壬生家の祖である今雄宿禰を合祀した。次いで社殿を建替えて雄琴神社と改めたのである。」と出ている。

(5) 系図纂要・地下家伝

六国史以外の伝承による内容は、その信憑性は疑われるかも知れない。また、江戸時代末期に書かれた「系図纂要」や「地下家伝」の内容も、参考の資料となると思われるので、一応書き止めておく。

「系図纂要」

小槻宿禰姓 称号大官 壬生

家伝系図以小槻改阿保又帰本姓

四道儒算道官吏局同之

私曰家本系為垂仁天皇御後之由注載之上者似無異論而彼天皇以降今雄以前中間
上祖等無所見故太以不審搏可尋記哉但彼曩祖事如愚推者善為天武天皇皇子舍人
親王四代孫乎 同云天武天皇 舍人親王 三原王 長谷 今雄

この内容は十分には読み取れない。これを、垂仁天皇から今雄までの間はよく判らない
が、天武天皇の皇子^{トキ}舍人親王（「日本書紀」を編纂した人）から四代後の孫ではないか、と
読むのだろうか？ 舍人親王の子に確かに三原王がいるが、その子に長谷の名前は確認でき
ないでいる。上の文はさらに長谷の子が今雄だと読める。すると長谷と今雄は親子で、今
雄は舍人親王の曾孫となる。舍人親王は天武5年(676)5年の生まれで、天平7年(735)11月
14日に薨じている。今雄は元慶8年(884)8年に没しているので、今雄が舍人親王の曾孫だ
とすると、少し時代が離れすぎているかも知れない。（余談だが、三原王の弟に淳仁天皇と
なった大炊王がいる。今雄を大炊神として祭ったのと何か関係はないか？）

そして、系図に垂仁天皇の子として意知別命が次のように書かれている。

母山城苜羽田刀弁山城大国淵女

意知別命 亦祖父別命又於知別命又落別王又祖別命

小目山君 二川衣君 小槻臣等祖

この中に於知別命を意知別命としているのは興味深い。小槻今雄が阿保朝臣の姓を賜る
際、「日本三代実録」に意別命の後なりと記されていることと関連しているからである。

（ここには誤植が多い。たとえば、小目山君は小月山君であるし、二川衣君は三川衣君の
誤りである。） 続いて、今雄の子として、^{ツキ}経覧、当平、糸平の名が出ていて、経覧だけは阿
保姓であるが、当平は「改阿保婦本姓小槻」とあるし、糸平は阿保姓を名乗った形跡がな
いのは、上に述べたような事情と結びつけて考えると興味深い。さらに、経覧は延喜17年
(917)卒とあり、当平は延長7年(929)9月卒とあるのは、何の問題もないが、糸平が天禄1
年(970)1年に85歳で卒したという記事には疑問が残る。というのは、父の今雄が884年に
卒しているので、糸平が今雄の死後生まれたことになるからである。

次に「地下家伝」を見ておこう。（^{チツ}地下とはもともと、宮中に仕えている人が、それ以外
の人を指している言葉で、後身分の低い人一般（庶民）を指すことになった。ここでは六
位以下で清涼殿に昇殿を許されていない官人のことで、堂上、殿上に対する言葉である。）

壬生 小槻宿禰 以小槻改阿保 又婦本姓

系譜云

垂仁天皇皇子意知別命後也（第一皇子誉津別命次皇子五十丹彦命次皇子鐸石別命次皇子
意知別命等後）蓋然自 垂仁天皇至于今雄中間疑 天武天皇皇子舍人親王後胤三原王長谷
（三原王子）今雄（長谷子也）

これも十分には読みこなせないけれども、「系図纂要」の文と大同小異であろう。特に長
谷は三原王の子、今雄は長谷の子と明記されていることは興味深い。したがって、長谷と
今雄は親子であって、長谷今雄は長谷の子今雄と読むべきであろう。

小槻今雄

年 月 日	誕生
年 月 日	叙正六位上 任左少史 兼算博士
貞観 15 年 月 日	修理東大寺勅使
同 16 年 月 日	任左大史 (右大史の誤りか?)
同 17 年 12 月 27 日	賜姓阿保朝臣 (息速別命後也)
年 月 日	兼但馬介
元慶 1 年 4 月 26 日	為大嘗会主基行事
年 月 日	任勘解由次官
元慶 3 年 11 月 25 日	叙従五位下 (元外従五位下)
年 月 日	任主税頭
元慶 8 年 7 月 日	死

これに続いて、今雄の子阿保経覧と阿保当平の名前が出ていて、当平の欄には「改阿保帰本姓小槻」と見える。しかしながら、糸平の名は出てこない。

(6) まとめ

以上から、小槻今雄の略伝をまとめておく。出自は他の小槻山君の人達と同様、垂仁天皇の皇子於知別命の後裔と考えられるが、天武天皇の皇子舎人親王の曾孫とも考えられる。仁寿 1 年(851)、勲功により雄琴荘を賜り、本拠を左京四条三坊に移した貞観 15 年(873)当時、正六位上左少史で算博士を兼ねていた。また、修理東大寺勅使に任じられている。貞観 17 年には阿保朝臣姓を賜ったとき右大史兼算博士で、但馬介を兼務している。元慶 1 年(877)には大嘗会の主基の事を行った。元慶 3 年には勘解由次官兼算博士・但馬介で従五位下に進んでいる。その後、主税頭にも任じられ、元慶 8 年(884)7 月 7 日に亡くなっている。子には経覧と当平がいたと思われる。

- 参考文献
1. 「古事記」和銅 5 年(712)
 2. 「日本書紀」養老 4 年(720)
 3. 「続日本紀」延暦 16 年(797)
 4. 「新撰姓氏録」弘仁 5 年(814)
 5. 「日本後紀」承和 7 年(840)
 6. 「続日本後紀」貞観 2 年(869)
 7. 「日本文徳天皇実録」元慶 3 年(879)
 8. 「日本三代実録」延喜 1 年(901)
 9. 「系図纂要」幕末
 10. 「地下家伝」天保 15 年(1844)
 11. 栗田寛「新撰姓氏録考証」明治 33 年(1900)
 12. 大津市立雄琴小学校「わが郷土雄琴の歴史を探る」昭和 47 年(1972)
 13. 大津市役所「新修大津市史」昭和 59 年(1981)
 14. 栗東町編纂委員会「栗東の歴史」昭和 63 年(1988)